

2018年度 文学部・人間科学部
「授業に関する学生アンケート」
調査報告書

2019年3月
文学部・人間科学部 FD委員会

目次

1. はじめに	3
①調査の概要.....	3
②アンケート項目	3
③アンケート実施状況	4
(a) 回答単位の分布	4
(b) 科目単位の分布	6
④ アンケート対象者の成績分布	7
2. 分析結果	9
① 各質問項目への回答の度数分布.....	9
② 〈読書習慣〉への回答の度数分布.....	11
③ 学生の行動と成績との関係.....	14
3. まとめ.....	14
① 「授業に関する学生アンケート」の実施率	14
② 学生の回答率.....	14
③ 継続設問の集計結果	14
④ 〈読書習慣〉の集計結果.....	15
⑤ 学生の行動と成績との関連	15
⑥ 学生による授業内容の評価	15
⑦ 自由記述について.....	15

1. はじめに

①調査の概要

1999 年秋に発足した文学部 FD 委員会は、2000 年度から毎年、授業に関するアンケート調査を実施し、報告書を取りまとめている。

本調査で対象となる教員は専修大学文学部および人間科学部の専任教員（特任教授、助教を含む）とし、基本的に全教員に前期・後期のいずれか 1 科目はアンケート調査を実施に協力してもらうよう依頼をした。アンケートを実施する科目は対象教員が担当する専門科目の中で履修者が最も多い科目を原案として提示したが、授業の実施状況を踏まえて教員からの申請があれば科目変更も可とした。

昨年度に続き専修大学ポータルサイトのアンケート機能を利用してアンケート調査を実施した。ポータルサイトを利用したアンケート実施に当たっては、文学部と人間科学部の各学科の FD 委員がアンケート実施科目を取りまとめ、教務課員が全授業のアンケートフォームを作成した。

今年度のアンケートの実施期間は回答率の改善を目指し期間を 3 週間とし、授業内でアナウンスをする機会を確実にとるために実施時期も前倒しした。前期は、7 月 10 日（火）～7 月 30 日（月）、後期は、11 月 30 日（金）～12 月 22 日（土）の日程でアンケート調査を実施した。

授業に関する学生アンケートのデータファイルのダウンロード、結果の集計・分析については、文学部・人間科学部教務課で行った。授業毎のアンケート集計結果は、1 月 29 日（火）の教授会で返却し、次年度の授業改善の資料として活用していただくとともに、改善点等があればシラバスに記載してもらうこととした。また、文学部・人間科学部全体の集計と分析結果に関する報告書（本報告書）は 5 月 28 日（火）の教授会で配付し、後日専修大学ホームページに公開する予定としている。

②アンケート項目

「授業に関する学生アンケート」の質問項目は八木(2004)¹⁾で使用されていた 8 つの項目（Q1～Q8）に 2 つの独自項目（Q9、Q10）と有益性と改善点を問う 2 つの自由記述項目を加えた計 12 項目を使用した。この内、〈出席状況〉〈当該科目に関する一週間の学習時間〉で学生自身の取り組み状況について、〈明解さ〉〈体系性〉〈知的魅力〉〈有益度〉で授業内容について、〈理解度への配慮〉〈自発的学習の促進〉〈教員の熱意〉で教員の配慮・姿勢についてそれぞれ回答させた。また、昨年度に引き続き〈読書習慣〉を問う項目を立てると共に、自由記述を 2 項目設定し Q11 で授業を受けて有益だった点、Q12 で授業をより良くするための意見を任意で記入させた。

アンケートは 5 件法で回答させ、Q1～Q8 は〈5 あてはまる〉〈4 どちらかといえばあてはまる〉〈3 どちらともいえない〉〈2 どちらかといえばあてはまらない〉〈1 あてはまらない〉

¹⁾ 八木紀一郎. (2004). 学生による授業評価データの分析と解釈. 京都大学高等教育研究, 10, 59－66.

い〉を選択肢とし、Q9〈一週間の学習時間〉については〈4 時間以上〉〈1 時間以上 4 時間未満〉〈30 分以上 1 時間未満〉〈30 分未満〉〈全くしていない〉を選択肢として回答させた。また、Q10 については〈①新聞、②学術書・学術論文、③授業の参考書、④文芸作品、⑤マンガ、⑥その他、⑦全く読んでいない〉の 7 項目を選択肢として、複数回答も可とした。

No.	項目	あてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらともいえない	どちらかといえばあてはまらない	あてはまらない	
Q1	授業にはほとんど出席し、積極的に参加した。						〈出席状況〉
Q2	この授業はわかりやすかった。						〈明解さ〉
Q3	授業内容は体系的であり、よくまとまっていた。						〈体系性〉
Q4	この授業は知的魅力(面白さ)のあるものであった。						〈知的魅力〉
Q5	この授業は自分の学習にとって有益だった。						〈有益度〉
Q6	学生の理解度や反応に配慮した授業の進め方がなされていた。						〈理解度への配慮〉
Q7	自発的に学習・探求するための指針や助言をこの授業から得ることができた。						〈自発的学習の促進〉
Q8	授業に対する教員の熱意を感じた。						〈教員の熱意〉
No.	項目	4時間以上	1時間以上4時間未満	30分以上1時間未満	30分未満	全くしていない	
Q9	この授業のために授業外に学修した時間(一週間平均)。						〈一週間の学習時間〉
No.	項目	選択肢					
Q10	最近3ヶ月で読んだものをすべてにチェックを入れてください(複数回答可)。	①新聞、②学術書・学術論文、③授業の参考書、④文芸作品、⑤マンガ、⑥その他、⑦全く読んでいない					〈読書習慣〉

Q11 この授業を受けて有益だった点があれば書いてください。 自由記述

Q12 授業をより良くするために工夫できることがあれば書いてください。 自由記述

図 1 「授業に関する学生アンケート」質問項目

③アンケート実施状況

本アンケート調査の実施対象者である専修大学文学部および人間科学部の専任教員（特任教授および助教を含む）は合計で前期 110 名、後期 111 名であり、この内前期 109 名、後期 109 名がアンケート調査を実施し、実施率は前期 99.1%、後期 98.2%となった。また延べ実施科目数は 243 科目となり（通年科目で前期・後期ともにアンケートを実施した場合は、それぞれを 1 科目としてカウントした）、多くの教員が前期・後期ともにアンケート調査を実施していた。

(a) 回答単位の分布

アンケートを実施した科目の全履修数は計 21,327 件にのぼり、この内 33.1%（前年度 23.9%）にあたる 7,062 件の回答が得られた（表 1）。回答者を在学年次別に見てみると 1～2 年次の回答数が多く、3 年次以上の学生の回答は少なかった（表 2）。

表1 「授業に関する学生アンケート」実施状況

	前期	後期	延べ数
対象教員数	110	111	117
実施教員数	109	109	114
実施率	99.1%	98.2%	98.6%
実施科目数	123	120	243
アンケート対象者数	10,656	10,671	21,327
アンケート回答数	4,526	2,536	7,062
回答率	42.5%	23.8%	33.1%

表2 学科・学年の分布（回答単位）

学科名	記号	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年以上	合計
日本語学科	LG	176	235	83	19	2	515
日本文学文化学科	LB	248	275	170	21	6	720
英語英米文学科	LA	140	502	349	49	17	1,057
哲学科	LT	212	254	115	21	12	614
歴史学科	LR	447	601	226	31	10	1,315
環境地理学科	LK	154	209	58	3	0	424
人文ジャーナリズム学科	LZ	263	103	57	13	8	444
心理学科	HP	126	394	172	22	1	715
社会学科	HS	322	555	258	40	4	1,179
経済学科	E	47	1	0	1	0	49
国際経済学科	W	7	11	0	0	0	18
法律学科	J	0	0	0	0	0	0
政治学科	P	0	0	0	0	0	0
経営学科	M	0	3	2	0	0	5
マーケティング学科	CM	0	1	0	0	0	1
ネットワーク情報学科	NE	0	0	4	0	0	4
大学院		0	0	0	0	2	2
合計		2,142	3,144	1,494	220	62	7,062

(b) 科目単位の分布

科目単位の回答率、すなわち履修登録者に対するアンケート回答者の割合の分布を示した（表 3）。回答率 10%以下の科目が 16.9%、10%から 20%以下の科目が 26.7%であり、全体の 43.6%の科目で 20%以下の回答率しか得られていない。回答率向上のためのさらなる工夫が次年度以降も求められる。

表 3 回答率の分布（科目単位）

回答率	科目数	比率	累積比率
-10%	40	16.9%	16.9%
-20%	63	26.7%	43.6%
-30%	26	11.0%	54.7%
-40%	24	10.2%	64.8%
-50%	22	9.3%	74.2%
-60%	18	7.6%	81.8%
-70%	16	6.8%	88.6%
-80%	18	7.6%	96.2%
-90%	6	2.5%	98.7%
-100%	3	1.3%	100.0%
合計	236	100.0%	

科目のカリキュラム上の性格の違いに応じた分布を示した（表 4）。開講学期は、前期と後期とではほぼ半々であった。必修科目は全体の 6.8%程度であり、転換・導入・教養科目を合わせた教養科目が、0.4%存在した（他はすべて専門選択科目）。ゼミナールや実習等の実習科目は、全体の 4.2%であった。

表 4 アンケート実施科目のカリキュラム上の位置づけの分布

	科目数	比率
前期	116	49.2%
後期	109	46.2%
通年	11	4.7%
合計	236	100.0%
教養	1	0.4%
選択	219	92.8%
必修	16	6.8%
合計	236	100.0%
講義	226	95.8%
実習	10	4.2%
合計	236	100.0%

④ アンケート対象者の成績分布

本報告書においては、アンケートによって得られた情報だけでなく、アンケート回答者を含む各科目の履修者の科目最終成績も用いて分析を行った。科目最終成績（点数）は、教務課が保有しているものを、学生の個人名を暗号化した上でアンケートデータに統合した。上述のように各科目の履修者のすべてがアンケートに回答しているわけではないので、本項ではアンケート回答者の成績分布を全履修者のそれと比較し、違いが無いか確認した（図 1A～D）。

アンケートに回答した学生の平均点は 77.3 点（SD = 15.5, N = 7,060）であるのに対してアンケート対象科目全履修者の平均点は 68.4 点（SD = 26.3, N = 21,159）であった。成績分布を見ると（図 1A, B）、アンケートに回答した学生はアンケート対象科目全履修者に比べ、0～5 点の学生が少ない。つまり、本アンケート調査の結果には実質的に授業に参加していないと思われる学生の回答はほとんど含まれておらず、しっかりと授業を受けた上で回答している学生が多数であると思われる。

さらに、実質的に授業に参加していないと思われる学生を除いた場合の成績に違いがあるかを検討するため、両群ともに総合評点が 0 点の学生をすべて除き同様の計算を行ったところ、アンケートに回答した学生の平均点は 78.1 点 ($SD = 13.4$, $N = 6,987$)、アンケート対象科目全履修者の平均点は 74.4 点 ($SD = 17.5$, $N = 19,456$) となり、本アンケートの回答者は全履修者に比べ総合評点がやや高かったが、その平均値の差は約 4 点であり、0 点の学生を除いたアンケート回答者と全履修者の成績分布の形が大きく異なっているとはいえないと思われる (図 1C, D)。

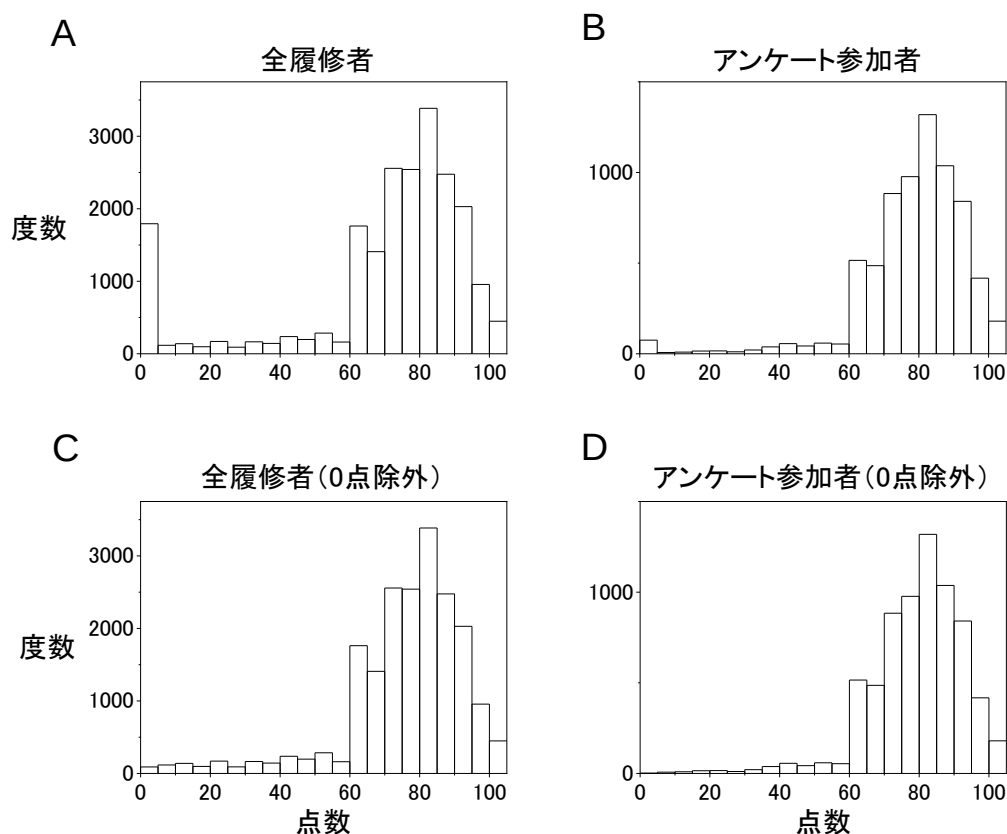


図 1 履修者およびアンケート回答者の成績分布

2. 分析結果

アンケート結果のデータは 5 段階で得点化し、回答者の最終的な成績評価となる総合評点（0～100 点）を回答ごとに付加した。このデータに対して以下の 5 つの集計および分析をおこなった。

① 各質問項目への回答の度数分布

Q1～Q9 の各質問項目の回答状況を示し、質問ごとの特徴を検討。

② 〈読書習慣〉(Q10) への回答の度数分布

〈読書習慣〉は今年度初めて設けられた設問であり、特定の科目単位ではなく、「最近 3 ヶ月に読んだもの」を複数回答形式で答えさせている。よって、Q1～Q9 とは別に、学生単位で集計・分析。

③ 学習行動と成績との関係

① 各質問項目への回答の度数分布

Q1～Q8 までの項目は経年変化を観察するために平成 25 年度から継続的に設定している質問項目である。

これらの質問項目のほかに、毎年、自由に設定できる質問項目として、Q9 および Q10 を設けており、昨年度から引き続き、Q9 に〈一週間の学習時間〉を問う項目を、Q10 に〈読書習慣〉を問う項目に設問を設定した。

大学設置基準第二十一条 2 項によれば大学において必要とされる学修時間は「一単位の授業科目を四十五時間の学修を必要とする内容をもつて構成することを標準とし、授業の方法に応じ、当該授業による教育効果、授業時間外に必要な学修等を考慮して、次の基準により単位数を計算するものとする。」と定められている。したがって半期 2 単位の講義科目では 90 時間の学修を必要とすることになる。通常、授業内での学修時間は一コマ 90 分の授業を 2 時間とみなし×15 回の授業で計 30 時間として計算され、残りの 60 時間分は授業外で学修時間を確保することが求められている。この 60 時間を 15 週で割ると、一つの授業に対して一週間当たり 4 時間の学修時間が必要になる計算となるが、回答結果で 4 時間以上の学修をした学生は 4%に留まった。また、〈30 分未満〉あるいは〈全くしていない〉と回答した学生が半数強となり、学修時間の不足が深刻であることが昨年に引き続き明らかとなった。中央教員審議会の学士課程に関するに各種答申では、この学修時間の確保が強く要請されており、大学として今後も何らかの対策を講じていく必要があると思われる。

以下、各質問項目の回答結果を示した（図 2、図 3、表 5）。

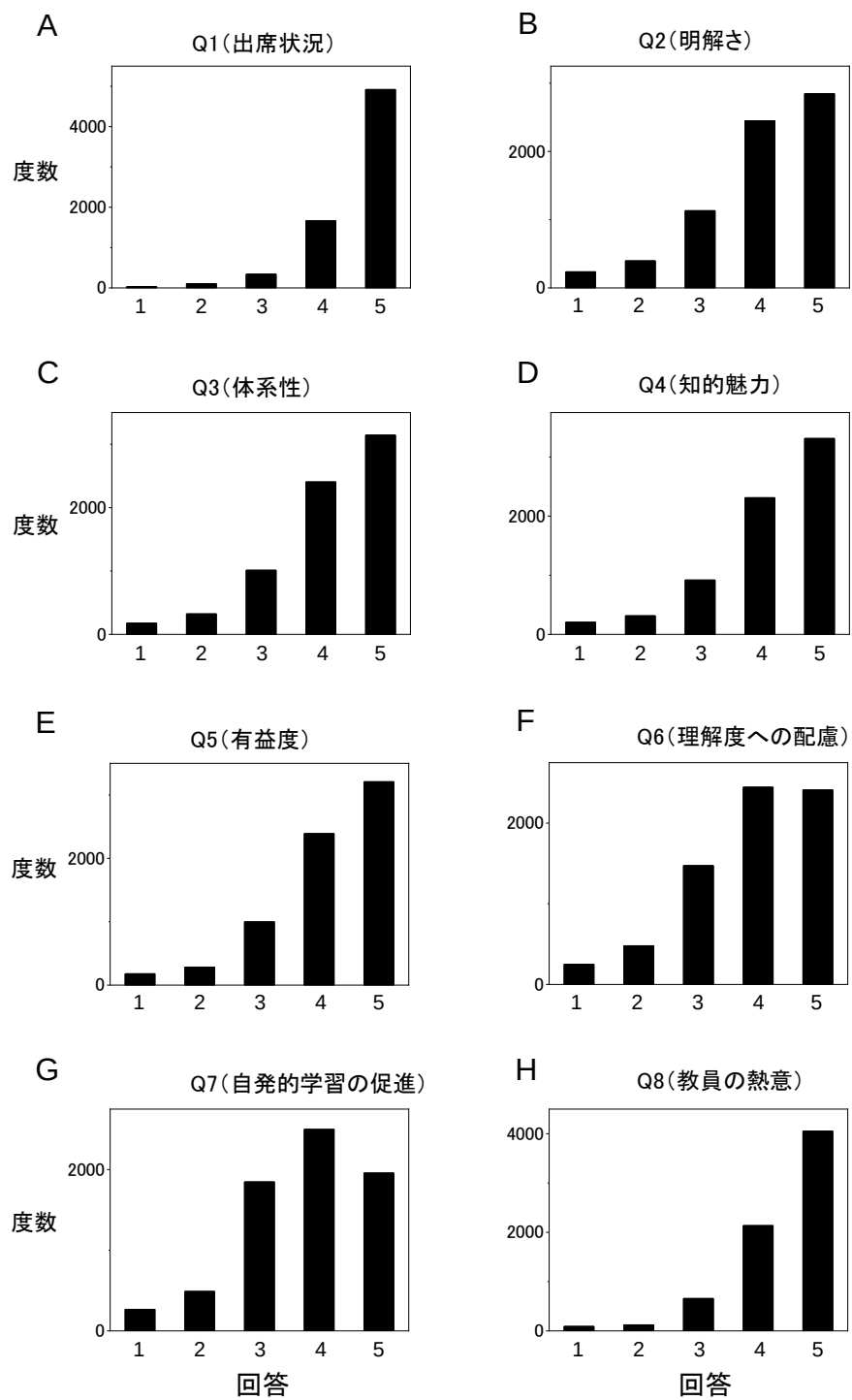


図2 各質問項目への回答 (Q1~Q8)

5 = あてはまる、4 = どちらかといえばあてはまる、3 = どちらともいえない

2 = どちらかといえばあてはまらない、1 = あてはまらない

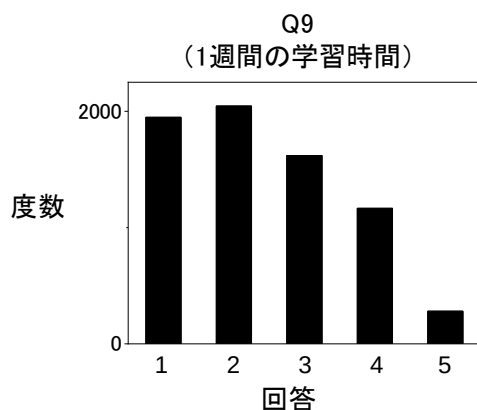


図3 Q9 への回答

5 = 4 時間以上、4 = 1 時間以上 4 時間未満、3 = 30 分以上 1 時間未満

2 = 30 分未満、1 = 全くしていない

注：Q9_一週間あたりの学修時間の選択肢は上述部分を参照のこと。

表5 各質問項目回答の平均値、標準偏差、回答者数

	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9
平均値	4.60	4.03	4.14	4.16	4.16	3.89	3.76	4.41	2.40
標準偏差	0.69	1.04	0.99	1.01	0.98	1.06	1.05	0.83	1.17
回答者数	7,062	7,062	7,062	7,062	7,062	7,062	7,062	7,062	7,062

②〈読書習慣〉への回答の度数分布

Q11〈読書習慣〉は、「最近3ヶ月で読んだもの」として、①新聞、②学術書・学術論文、③授業の参考書、④文芸作品、⑤マンガ、⑥その他、⑦全く読んでいない、の7つの選択肢の中から、複数回答形式（いくつでも選択可）で選んでもらった。

読書習慣は、Q1 から Q9 までと異なり、特定の科目についての設問ではなく、本来学生ごとに一意の回答が得られるはずである。しかし、実際の回答においては、複数科目に回答した学生で、回答が一貫しない者が散見されたが、これはアンケートの信頼性に関わる部分である。そのような事実があることを認識した上で、特に処理は行わず、そのまま分析した。

まず、全学生における各選択肢の選択率を確認した（表6）。選択肢は選択比率の多い順

に並べ替えている。もっとも多かったのは〈マンガ〉で、52.7%の学生が最近3ヶ月の間に読んでいるが、前回の55%よりは低下した。また、前回46%だった〈授業の参考書〉も52.3%と増えた。つづいて〈学術書・論文〉、〈文芸書〉が47.8%、43.9%と4割以上の学生が読んでいる。前回43%だった新聞は、38.5%となったが、媒体が曖昧なので、今後明確化すべきと考えられる。以上を踏まえると、文学部・人間科学部を中心とした学生の読書の質は前回調査と比較すると良くなっているかもしれない。

表6 〈読書習慣〉の各選択肢の選択率（延べ学生数、N = 7,062）

種類	比率
マンガ	52.7%
授業の参考書	52.3%
学術書・論文	47.8%
文芸作品	43.9%
新聞	38.5%
その他	14.7%
全く読んでいない	6.7%

つぎに、属性別（学年、学科）の各選択肢の選択比率の違いを比較した。

まず、学年別の各選択肢の選択比率を表7に示した。〈新聞〉と〈学術書・論文〉は3年生以上の高学年になるほどよく読まれている。これは、就職活動や卒業論文の執筆に関連するものであろう。これ以外の項目についても学年が進むにつれて微増する傾向が見られ、〈全く読まない〉の回答率もこれに沿って減少している。

表7 学年別の〈読書習慣〉

種類	1年	2年	3年	4年	5年以上
新聞	38.0%	36.6%	40.0%	55.0%	51.7%
学術書・論文	38.1%	50.4%	53.5%	60.9%	70.0%
授業の参考書	50.0%	53.6%	52.6%	50.9%	65.0%
文芸作品	47.4%	42.0%	41.0%	46.4%	80.0%
マンガ	54.8%	50.2%	53.0%	60.0%	78.3%
その他	17.9%	13.6%	11.1%	21.8%	21.7%
全く読んでいない	7.0%	6.8%	6.8%	2.7%	0.0%

さらに、学科別の各選択肢の選択比率を表 8 に示した。各学科の相対的な特徴は、以下の通りだった。ただし、学科間の順位のみに着目した記述とした。

日本語学科（LG）：〈新聞〉〈文芸書〉〈マンガ〉の読書量が多い。

日本文学文化学科（LB）：〈参考書〉〈文芸書〉〈マンガ〉の読書量が多い。

英語英米文学科（LA）：〈学術書・論文〉〈参考書〉〈マンガ〉の読書量が少ない。

哲学科（LT）：〈参考書〉〈文芸書〉〈マンガ〉の読書量が多く、新聞の読書量が少ない。

歴史学科（LR）：〈学術書・論文〉の読書量が多い。

環境地理学科（LK）：〈学術書・論文〉の読書量が多く、〈参考書〉〈文芸書〉〈マンガ〉の読書量が少ない。

人文・ジャーナリズム学科（LZ）：〈新聞〉の読書量が多く、〈学術書・論文〉〈参考書〉の読書量が少ない。

心理学科（HP）：〈学術書・論文〉〈参考書〉の読書量が多く、〈新聞〉〈文芸書〉〈マンガ〉の読書量が少ない。

社会学科（HS）：〈新聞〉の読書量が多く、〈文芸書〉の読書量が少ない。

表 8 学科別の〈読書習慣〉

種類	LG	LB	LA	LT	LR	LK	LZ	HP	HS
新聞	47.2%	31.0%	33.4%	29.8%	39.5%	42.0%	61.0%	27.0%	44.1%
学術書・論文	40.4%	37.1%	24.6%	45.8%	74.6%	49.8%	29.3%	75.8%	41.2%
授業の参考書	54.8%	62.2%	44.4%	56.8%	51.3%	34.9%	49.5%	57.5%	56.1%
文芸作品	50.9%	75.3%	42.3%	62.5%	37.9%	25.9%	46.6%	26.7%	37.2%
マンガ	59.8%	73.2%	40.0%	62.1%	52.2%	33.3%	53.6%	48.7%	53.5%
その他	14.2%	16.3%	14.9%	15.6%	13.5%	16.5%	18.7%	12.4%	14.0%
全く読んでいない	3.7%	3.9%	9.0%	3.6%	5.9%	10.4%	4.5%	8.1%	8.2%
回答者数	515	720	1057	614	1315	424	444	715	1179

※読書の各種類について、学科間比較における上位 3 位が網掛け、下位 3 位が下線。

③ 学生の行動と成績との関係

学生の行動と成績との相関係数（ピアソンの積率相関係数）を表 9 に示した。相関係数が 0.5 以上の項目は存在しなかった。授業への参加（出席状況）は、若干の正の相関があったが（0.29）、学習時間は相関係数の値が 0 に近かった（0.03）。

表 9 学生の行動と成績との相関係数

学生の行動	成績との相関係数
Q1. 出席状況	0.29
Q9. 学習時間	0.03

3. まとめ

① 「授業に関する学生アンケート」の実施率

例年実施率の向上を目指しているが、本年度は対象教員前期 110 名、後期 111 名に対して前期 109 名、後期 109 名の教員が授業アンケートを実施した（昨年度は 110 名中 105 名）。実施率にして前期 99.1%、後期 98.2%という高い数値を達成できており、来年度以降も継続してこの実施率を維持していきたい。

② 学生の回答率

アンケートの回答率は年間で 33.1%となり、依然として低いものの、昨年度に比べると改善が見られた（昨年度は年間 23.9%）。

この理由としては、昨年度から継続して授業担当教員に呼びかけている、授業時間内にスマートフォンで回答するための時間を確保してほしいという依頼が徹底してきたことが考えられる。とはいえものの、依然として低い水準であることには変わりはない。また、表 3 の科目単位の回答者数の分布でわかるように、74%の科目で回答率が 50%以下となっており、54%の科目で回答率が 30%以下となっていた。個々の教員への結果のフィードバックという観点からも問題が多い。

授業時間内でのスマートフォンでの回答時間の確保をさらに徹底すること、Course Power やレスポンスなど他の授業支援ツールとのシステム上の連携も検討することなど、回答率向上に向けたさらなる取り組みが必要であろう。

③ 継続設問の集計結果

授業内容や学生の学習行動についての継続設問（Q1～Q8）については、例年と大きく異なる結果は観察されなかった。また、当該授業に関する一週間の授業外学習時間（Q9）については、「全くしていない」学生が 27%、「30 分未満」の学生が 29%となり、全体の約半

数強が 30 分未満しか授業外学習をしていない。大学設置基準で定められている「4 時間以上」の授業外学習をしている学生はわずか 4%である。

授業外学習を促すことは、高等教育政策をめぐる各種審議会答申等で繰り返し求められていることなので、引き続き実効性のある対応策を検討していく必要があると考えられる。

④ 〈読書習慣〉の集計結果

〈読書習慣〉(Q10) について、新聞、学術書・論文、参考書、文芸書といったジャンルの読み物を、おおむね半数近くの学生が最近 3 ヶ月以内に読んだことが確認された。また、新聞や学術書・論文は高学年になるほど読む学生が増えるという結果や、学科別の特徴も前年度とほぼ一貫していた。

⑤ 学生の行動と成績との関連

各科目の教育効果の客観的な成果指標である成績と学習行動（学生の努力）との関連をピアソンの積率相関係数を算出することで分析した。

授業への参加（出席状況）は、若干の正の相関があったが（0.29）、学習時間は相関係数の値が 0 に近かった（0.03）。学習時間と成績とに相関がないことには多くの原因が考えられるが、科目ごとの状況もあるため、質問を工夫することによってより情報を集めた上でさらなる分析が必要と考えられる。また、学生個人内で複数年度に跨がるデータを分析することも有用な情報を得ることに資する可能性がある。このような形式の全てのアンケートに当てはまることではあるが、実際の学生の行動とアンケートの回答との関係も調べる必要があるだろう。

⑥ 学生による授業内容の評価

学生による授業内容の評価（教員の努力）については、各科目について年度間の比較や、他教員の他科目との比較が教員による授業改善に対して特に重要な意味をなすものと考えられる。現在、教員に対するフィードバックでは同一期間の他科目との比較が可能であるが、過年度との比較や属性を限定した科目群との比較ができるような方法も検討してもよいかもしれない。各教員が各科目における授業の改善を行うにあたり、アンケート結果を受けた改善目標を具体的に設定することも有効である可能性がある。

⑦ 自由記述について

自由記述は記入率が低い。しかしながら、場合によっては情報量が多い。各教員に対するフィードバックを行うだけでなく、他科目に対する自由記述内容も共有することで、授業改善のヒントを得るとともに、LMS やレスポンスなどを活用することで、自由記述により得られるような内容を学生から収集する工夫も考えた方が良いと思われる。